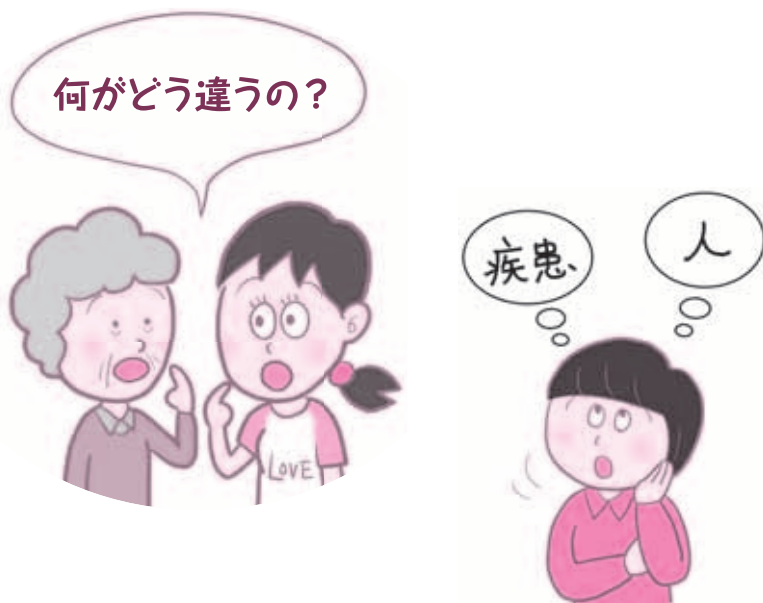


認知症の人を 2つの視点で理解する

認知症の人は私たちと何が違っていて、何が同じなのかを考えてみましょう。

当然のことですが、私たちと認知症の人の違いは、認知症（疾患）があるかないかだけで、ほかは全部同じです。

要するに、認知症の人を理解しようと思うなら、「認知症（疾患）」と「人」の2つの視点で考えることが大事なのです。



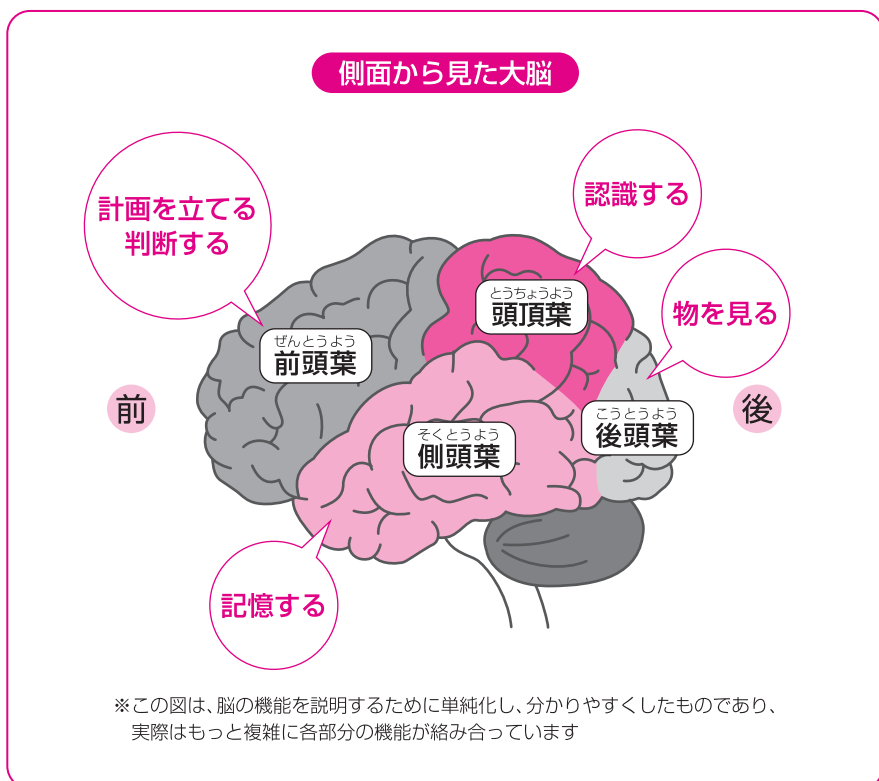
2つの視点で考える

大脳の働きを見てみよう

～人はどのように考え、行動するのか～

まずは、「人」という視点で考えてみましょう。

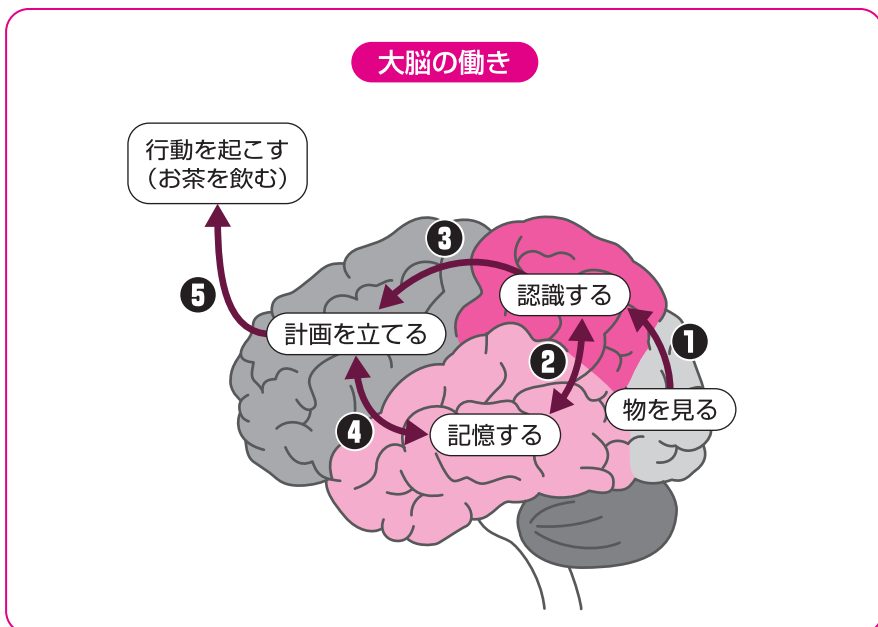
私たちは普段、頭の中でどのように考え、どのように行動しているのでしょうか。下図は、側面から見た大脳を表したもので、各部分の名称とその役割を大まかに示しています。



●生活場面での実際の脳の機能を見てみよう

例えば、喉が渇いて「何か飲みたいな」と思ったあなたの目の前に、ペットボトル入りのお茶がありました。このときあなたは、**後頭葉**でこれを見て、**頭頂葉**で認識しようとし、「これは何だろう?」と**側頭葉**に尋ねます。「見たことがある」「知っている」(記憶の中にある)からこそ、たとえ「お茶」という文字が見えなくても、それがお茶であることが分かる(認識できる)のです。

しかし、「これはお茶だ」と認識するだけでは不十分です。次に、飲む方法を考えなければなりません。そこで、**前頭葉**で「飲む計画を立てよう」とします。あなたは、「どうやったら飲めるだろう?」と、もう一度**側頭葉**に尋ねます。そして、過去に「フタを開けたことがある」からこそ、今回も正しくフタを開けることができるのです。そこで初めて、「お茶を飲む」という行動を起こすことができます。





ペットボトルのパッケージのどこを探しても、「飲む時はフタを開けてください」とは書いてありません。それでもみなさんは、当たり前のようにフタを回して開けています。

私たちが何気なく行動していることも、自分の記憶を頼りにしているのです。「**記憶が大事!**」ということ覚えておいてください。

「認知症」は病名ではなく、 状態である

続いて「認知症 (疾患)」という視点で考えてみましょう。大事なのは、認知症は病名ではなく、状態を表した言葉であるということです。病名としては「アルツハイマー型認知症」「脳血管性認知症」「レビー小体型認知症」「前頭側頭型認知症」となります。ほかにもさまざまなものがありますが、今回はその中でも一番多いとされる「アルツハイマー型認知症」に焦点を当てて進めます。

アルツハイマー型認知症
脳血管性認知症
レビー小体型認知症
前頭側頭型認知症



なるほど！
一口に認知症といっても
いろいろなタイプが
あるのね

●アルツハイマー型認知症の定義と認知機能障害

認知症とは、「脳に起きた変化によって、記憶障害が起こり、日常生活を送ることが困難になっている状態」と言えます。特にアルツハイマー型認知症は、記憶の障害を主症状とします。先ほど、私たちの生活には「記憶が大事!」とお伝えしました。その記憶が障害されてしまうのが、アルツハイマー型認知症なのです。

アメリカの精神医学会が定義するDSM-IV(精神疾患の診断・統計マニュアル)では以下のように記されています。

1. 記憶障害
2. 次のうち、1つ以上の症状がみられる
失語・失認・失行・実行機能障害
3. 1、2の障害により、仕事・社会活動・人間関係が
損なわれる
4. 意識が清明である
5. 病歴や検査から脳の器質性変化がある

(筆者により一部簡略化)

この定義の中で注目してほしいのが、1と2に明記されている**記憶障害・失語・失認・失行・実行機能障害**です。これらを総称して、認知症の**認知機能障害**と言います。

認知機能障害とは、認知症になると出現する症状のことで、**中核症状**と表現されることもあります。